

# 心理学講座たより

「心理学講座」第2回配本附録

東京都神田局区内神保町2の24 電車通り 株式会社 中山書店



## 感想

戸川 行男

いつも一つの閉ざされたままとまりをなすものであるか否かの検討は、この言葉の使用にも密接に関係しているかと考えている。用語を厳密に検討することは、現象を正しく観察し記述するためにきわめて必要である、ということは何れでも百も承知のことながら非常にしばしば忘れられる。言葉だけあって現象がなかつたりする。

こうした反省は、われわれのように臨床部門を学んでいる者にとっては特に必要であるかと思う。臨床心理学は術語過剰に悩んでいる。この概念の整理と検討とは、同一化、置きかえ、投影、とり入れ、の類から、察知感情、注察概念、侵入感情の類にもおよんでなされねばならないものであろう。いうまでもないことであるが、言葉を作ることとは現象に近ずいたことではない。(早稲田大学教授)

ヘルムホルツと

## 実験心理学

和田 陽平

ある研究会で、生きた人間を把握するという言葉に意見を提出してみたことがある。言葉じりを把握しようで報告者にはすまなかつたが、こちらのいいたかつた点は、折角厳密な実験をやり厳密な論理をすすめ、しかもその話のおしまいが生きた人間の把握などという曖昧な言葉の登場でけりがつくのでは竜頭蛇尾の類だといふのである。生きた人間とはなにか。人間を把握するとはなにを意味するのか。はっきりと適確に別の言葉で表現できるものならば、そのように表現すべきで、そうでなかつたらこれは科学の言葉ではないように思う。

同様の印象を人格の全体的把握とかこうした類の言葉にも感ぜざるをえない。全体を語る以上はそれが閉じた全体であるか開いた全体であるか区別しなからなければなるまい。精神が閉じた全体をなすものであるか否かは、その簡単にはきめられないと思ふ。それがきめられないと、全体性という言葉もやすやすとは使えないことにならう。近頃ペースナリティーという言葉が流行であるが、個人の精神が

私の新入生の頃、研究室には外国の偉い心理学者達の肖像が飾ってあつた。一日、それを見物していたところ、中にたまたま抜きんでて他を圧する体の偉容の風貌に当面した。いくらかヒンデンブルクに似ているけれどもその眼光はさらに鋭くかつ深く、亨々たる大樹の風格がある。あつと思をのむような

気持で近く寄って名前を読んだらヘルムホルツとあった。あの肖像はいまはどうなったか知る由もないが、見たことのない人はボーリングの「心理学の歴史における感覚と知覚」の扉の肖像をごらんになれば、あるいはわかつていただけるかも知れない。

二年生になって、エリス訳の「聴覚」を讀むにいたって今度はその内容の重量感に圧倒された。同じボーリングの「実験心理学史」の扉絵はゾントの肖像だ。実験心理学がゾントによって大成された事はいわば通説だが、感覚・知覚の研究は実にヘルムホルツから出発した、或はその幹の上に繁茂したといつてもいい過ぎではないだろう。

彼が神経興奮の伝導速度を初めて測定した事は人のよく知るところである。しかもその値は現在の知見と大差がない。人間の母音の構造については周知のようにヘルマンの非調和固有音説と、ヘルムホルツの調和部分音説とが対立して存在したが、現在では後者に分のある事は明かだ。しかも母音を発声する口の形をして見て、その前で音叉をならして、どの音が最もよく共鳴するかを調べたり、あるいは発声母音を共鳴器で聴いて分析するようなやり方で得られた彼の結果は、約九〇年をへだてた現在の結果と大体に於て一致した傾向が見られるのである。また、聴覚説では彼は共鳴説を

主張した。それは振動数の異なる音は内耳の蝸牛殻内で異なる場所に反応を起し、その場所から発する神経に興奮を生ぜしめるものとし、それぞれの神経は各固有の音の高さの感覚を起す特殊神経エネルギーをもつものと考えられたいわゆる場所説であるが、彼はその場所の決定を共鳴現象によるとし、共鳴器として最初コルチ氏器官のコルチ氏柱、後には基礎膜の繊維を考えた。

氏柱、後には基礎膜の繊維を考えた。話説といわれる頻度説——音の高さは興奮の頻度によって決定されるとする説——と大きく対立してきた。電話説は最高可聴音の限界と神経繊維に生ずる神経衝撃の最大頻度との間にはなほだしい差のあることなどから概して旗色が悪かったが、一九三〇年にワイヴァア・ブレイ効果が出るにおよんで再び盛んに問題にされた。しかし後にこの効果は必ずしも純粋に神経の動作電流のみによるものではない事が明かになったし、動作電位と刺激音との間の同一頻度は、中枢に近づくほどきわめて限られた程度にしか認められない事もわかって来た。これに對して場所説の方はモルモットの蝸牛殻などでは振動数に對する相当こまかいマップがすでにできており、内腔状態や大脳の聴覚領においても刺激音の振動数によつて興奮部位の異なるところが最近確めら

れた。また個々の聴神経繊維が振動数に對して特殊性をもつ事も見出されている。場所説と頻度説のどちらが正しいかは今日でも決定し難いが、少なくとも場所説に有利な結果が豊富にあることは事実である。

今日、ヘルムホルツの說いたような簡単な基礎膜の繊維の共鳴現象の考え難いことはいうまでもないが、今を去る百年近くも前に、当時の乏しい材料にもとづいて場所説をうち建てたことはなみなみならぬ偉さだろう。視覚では例のヤング・ヘルムホルツの三原色説が有名だ。これは混色の現象や色盲その他を考慮してたてられたものだといわれるが、混色の法則からは原色は三つあればこと足りるという結論は出るが、四つ以上あつてはならぬといふことは出てこない。これこそはきわめて乏しい事実から立てられた想像的な所説であつた。ところが最近のグラニットの網膜における神経繊維の動作電流の研究や、本川博士の電流の光覚刺激閾を利用したの研究に、ある程度これと一致した結果の得られた事は、今更ながらにヘルムホルツがいかに深い見通しをもつていたかに驚かされる。知覚や感覚の研究はヘルムホルツの幹から繁茂した。ボーリングが彼の知覚感覚史の扉にその肖像をかかげたのはまことに至当といわなければならない。(京都大学教授)

# 日大心理学教室の

## 脳波的描記装置

渡 辺 徹

脳波の研究が、わが国でもおいおい盛んになってきたようである。この五月中旬には、仙台で第二回脳波学会が開かれようとしている。本巻にも本川博士の脳波に関する論稿が載るそうで、この方面の研究の隆盛に拍車をかけることだろう。医学では、これを精神病、神経病の診断に用いようとして熱心な探索をつづけている。われわれの大学では、昨春、三星式脳波描記装置をすえつけた。本年卒業の学生の中には、早速これを使って論文を作るものも現われた。論文のテーマは、「脳波とパーソナリティ」というもので、神経質や向性をインヴェントリイで調べ、それと脳波との関係を見たものである。すこし大胆なところみだが、それでも何か関係が見つかりそうである。パーソナリティのようなものが、こういう外面的なもので捉えられたら大変面白いことになるだろう。これからは楽しみである。われわれの教室では、外部からの依頼で脳波描記をすることもやっている。テンカ

ン患者の脳波は、かなりよく描記される。もつとも現状では、脳波だけでテンカンを確実に診断できるところまではいっていない。テンカンの中には、脳波にはなんら異常を示さないものもあるからである。それにしてもこれは有効な方法として現在大いに注目されている。テンカン以外の大脳疾患は、まだまだ脳波では手に負えない。脳波は、知覚研究にとつても有効な方法となりそうである。東京文理大の学生が二人、われわれの大学の装置を用いて、前者は脳波と残像との関係、後者は脳波と注意との関係を調べて、興味ある結果をえた。自慢をするようだが、われわれの大学の装置は最新式のもので、性能がよいとの評判である。これから心理学上のいろいろな問題の研究に利用できることだろう。篤志家は、夏休みなどにでも、われわれの教室にこられて、この装置を利用されたい。われわれとしても、それを歓迎する。ただし真空管がいたむことだし、実費ぐらいは頂戴したいものである。装置の取り扱い、その方の専門家である小薄脇三医学博士が指導に当るから間違いはない。

ついでに書けば、われわれの大学は、応用心理学に重点をおき、脳波もそんなことに

用いられるが、しかし理論方面にも立派に利用されよう。千葉胤成を教授に、小保内、盛永、上(直道)、井村(恒)諸氏を講師陣にもっていることから見ても、理論方面に手ぬかりのありようはずがない。これから脳波を理論的研究の方面にも使いたいと考えている。(日本大学教授)

### 毎日出版文化賞受賞

## 生理学講座

日本生理学会編

「この講座では、純粋の生理学のほかには生物学、心理学、身体教育学、医学などの関係領域の学問を、生命の科学として広い立場から集大成している。事項や執筆者は、さすがに学会の編集だけあつて適切に選ばれており、他の領域の人にもわかるように平易にくだいてある。全部完成ということでは画期的な事業として、特筆に価する。

生理学は生命の科学であり、身体、科学である。すなわち新しい生理学は、生命を知り、人間を知るの基礎である。今日これを除外して、人間・学術・文化を云々することはできない。現代教育学問の中に占める生理学の地位の重大さを、本講座によって改めて認識すべきであろう。」

(毎日新聞27年10月29日所載)  
教育大学教授杉端三郎博士評

全一箱八一、四〇〇円(内容目録進呈)

# 読者のページ

立派な良書だと思ふ。とくに今後、私のぞみたいことは、概論的な講座となることをなるべく避けていただき、研究のゆきわたらない現状を明示して、問題のあり方を解明してもらいたいと思ふ。なお、異常心理や文化、社会心理の各項についてはとくにくわしい解説を希望します。

東京都中央区湊町 医師 田中紀三郎

心理学の学問的な性格からして、最新の研究、理論、文献にもとづいて書きおろされた点が最大の魅力であり、価値であると思ふ。視知覚の項には感銘した。この部門でのよりよき新しい研究結果を切望します。

豊橋市花田町 生田 博之

現本を手にしてみて、予想以上に優秀なおどろきました。続刊を大いに期待しています。なお心理学辞典が欲しいものです。呉市和庄通り 会社員 矢田 豊

この種の講座ものの刊行を非常に結構だと思ふ。今後さらに学術研究（とくに

外国などの）に関する資料の発行を企画してください。どうぞよろしくお願いいたします。

宇都宮市 宇都宮大学 島田 茂男

現代の心理学のあり方が非常にこまかく分析されているので読むのに大変わかりやすく、われわれのよき手引きともなる良書と思ふ。いろいろの困難もあるうと思ふますが、できるだけ予定通りに発行されんことをのぞみます。

横浜市中区 心理学研究者 山口 是治

## 編集部から

第一回配本は内容見本で期待されていたとおり、ガツチリした良書であるという好評を博し、編集部一同たいへん喜んでおります。第二回以降の準備も順調に着々と進んでおります。いずれも第一回配本に匹敵する手がたい論文ぞろいで、著者の諸先生方がいかに苦心され、丹誠をこめられたかがうかがわれます。

今度、講座だよりの中に新しく読者のページをもうけました。講座についての御感想や御批判をどしどし御よせ下さいませう。御願いたします。なお編集部一同皆様の御期待にそぐべく大いに張り切っております。〈心理学講座編集部〉

## 心理学講座

第三回配本内容

知能の意味・理論	廣島大教授	古賀行義
知能検査	日大助教授	安藤公平
カンセリング—中・高校—	教育大講師	井坂行男
同	—大学—	中村弘道
フラストレーション	京大教授	佐藤幸治
適応・不適応	早大教授	戸川行男
性行動	教育大教授	桂広介
ホメオスタシス	—期間と安定性の一般—	
自律神経	慶大教授	林 麟
疲労・休息	東大教授	冲中重雄
	醫學博士	豊原恒男
リクリエーション	立教大教授	前川峯雄
	教育大教授	